

編集委員

インタビュー

大木の破壊力に注意必要

兵庫県立大学名誉教授(環境保全)

服部 保さん(66)に聞く

豪雨の土砂災害増加、六甲山の防災対策は?

8月に丹波市や広島市北部などを襲った集中豪雨は、土砂災害の恐怖を再認識させた。神戸の六甲山も主要道路が土砂崩れし、交通網に大打撃を受けた。六甲山は、広島市で多くの犠牲者を出した土石流の一因である「まさ土」が多いといわれる。兵庫県立大学名誉教授(環境保全)の服部保さん(66)は、六甲の植物生態を研究。大木の増加が被害拡大につながると指摘し、減災のための森林整備を訴える。

(津谷治英)

「なぜ、六甲山にまさ土が多いのですか?」

「花こう岩の割れ目に雨などがしみこみ、風化してできるのがまさ土です。非常に多い特徴があります。六甲山は大半が花こう岩でできているため、その土壤は拡大しやすいわけです。かつて神戸周辺の気候は少雨でしたが、近年は雨量が増加する傾向にあります。10月、淡路に上陸した台風19号も1時間に100ミリ近くを記録しました。このような大雨は、そうした土壤拡大の要因になります。表層はほとんどまさ土と考えていいでしょう。また『昭和42年7月豪雨』から約50年、大きな水害を経験していませんから、土壤の堆積も懸念されます」

「地中への影響は。

「阪神・淡路大震災など近年の地震で、中腹付近の深い森の中に予想できない亀裂が生じている可能性があります。割れ目が大きいと、雨は深い地中にまでしみこみます。深層付近の土壤も、まさ土で弱くなっていることが推定されます」

「大災害の危険要素ですね。さらに心配なのは、六甲山系

はつとり・たもつ 1948年
神奈川県出身。神戸大学大学院博士課程修了。92年から姫路工業大学(現・兵庫県立大学)の自然・環境科学研究所教授。昨年から現職。六甲山の植物生態研究に携わる。



川西市、能勢電鉄ビル(撮影・
後藤亮平)

適切な伐採で予防措置を

思います

「放棄林は他にどんな影響が。

「生息植物の遷移が進みます。六甲山は短期間で、針葉樹のアカマツから落葉樹のコナラ林を経て、今後はアラカシを中心とした破壊力は計り知れません。各地の大被害につながっています。大木の数や場所、その根元付近の土壤を調査することは減災の第一歩です。急斜面をはじめ、周囲に危険を及ぼす箇所があれば、行政や関係機関に伐採を勧めています」

「なぜ大木は増えたのですか。

「六甲山には縄文、弥生時代の遺跡が残っています。古くから薪炭などの燃料を供給する里山として利用されてきた痕跡があります。当時、木は大きくなる前に切られていたはずです。過剰な伐採はほげ山の原因となります。適切だと山の安全管理につながりますが、適切だと山のエネルギー源の変化で燃料林は不要となり、やがて里山は放棄林となりました。人の手が入らないと、木は自然と大きくなっています。しかしエネルギー源の変化で、木は自然と大きくなっています。しかしお盆林となりました。人の手が入らないと、木は自然と大きくなっています。今のように大木が繁茂する状態は、弥生時代以来の六甲山が初めて経験する状態だと思います」

記者のひとこと

服部さんは六甲山の活性化を目指す市民団体「六甲山大学」の実行委員長も務める。愛読書は万葉集。四季の植物をめでてきた日本人の心は、森づくりの参考になるという。多角的な視点で自然を見守っている。

「最近は理解が深まってきたことを感じます。ボランティアを募つて間伐をし、山の自然保護に努めている市民団体が増えてきました。歓迎すべきことです。植物生態の観点から防災、減災を考える市民を増やすには環境学習が大切。私は小学生くらいから始めてくれることを願っています」